

## 市川君、安らかに眠りたまえ

昭和33年卒業 富田 達也

今、君との若いときを思い出しています。

高血圧、糖尿病、動脈硬化の進展と典型的な成人病を持つ我が身が、まさか、あの元気者、市川君の追悼文を書くことになるとは、夢想だにしなかったことである。

彼との接点は、やはり野球である。昭和33年卒の我が同級生には市川、角田、西脇という高校時代に甲子園を目指して、本格的に野球に取り組んだ名手が居た。私は草野球ながら、中学、高校と6年間、夢中になって野球を楽しんだ経験があり、彼等3人の勧誘で野球部に入り以来3年間野球を中心としたつき合いがはじまった。

2年生の夏、初の対外試合、熊薬との定期戦のこと。オール長崎大のメンバーでもあつた彼等3人は当然最初から、レギュラーで中心選手である。私は実力未知数でベンチに居た。試合後半チャンス到来、代打に起用された私の打球は右中間をライナーで破る2塁打となり、2塁走者市川君を生還させることになった。以後、メンバーが卒業まで定着した。

1番レフト西脇、3番ショート市川、4番ピッチャー角田、6番セカンド富田、彼等3人が主力であった3年間、ほとんど負けた記憶がない。まず投手力が万全であったこと。先発、角田投手は、豪速球が売りもので、3振の山を築いたが、疲れるので終盤では四球を連発するくせがあった。そこで、最終回は、市川投手の登場となりよくコントロールされた大きなカーブとキレのよい速球で試合をしめくったものである。守備力も、堅実なレフト西脇、華麗なフットワークで広い守備範囲のショート市川の存在があり、まずまずだったと思う。一度だけだが、ショート市川の早い捕球からトスで、6、4、3の併殺を完成了記憶がある。打つ方でも、彼等3人が抜けた存在であり、私の打席では、西脇、市川、角田の中1人か2人は、累々に居することになるが、熊薬との初打席以外殆どヒットを打った記憶がないのは残念である。



1955年6月 熊本遠征 宿舎にて  
2年生野球部員 後列（左から）工藤、恒見、市川、角田、前列 西脇、富田

野球以外に市川君と私との間には2人だけの接点がある。熊本に2回、博多に1回対抗試合の度、遠征したが、2人で、こっそり宿舎を抜け出し、ストリップショウや赤線で遊んだ。夜半、もしくは、朝早く宿舎に戻り、何食わぬ顔で沈黙を守ったのは、2人の暗

黙の了解事項であった。

最後に彼に会ったのは昨年春の甫陵会だったと思う。酒をぐみかわす喧嘩の中で、彼と2人きりの瞬間があった。

「俺も、早く、トミさんのように気楽になりたいヨ」

ふともらした彼の言葉は、きっと本音だったと思う。因みに私は60才で定年を迎え、気楽な晩年をエンジョイしている。忙しく、走りに走った過去の40年にくらべると、黄金の日々である。せめて退官後の数年、彼にも気楽な日々を送らせてやりたかった。

市川君よ、安らかに眠りたまえ

私から送る言葉はこれだけである。

## 市川先生・三明先生のこと

昭和35年卒業 高木 康

長薬野球部OB会、長薬同窓会にとってメモリアル・イヤーは大変な幕明けとなりました。1月6日、市川正孝先生の訃報に続いて、2月26日、渡辺三明先生の急逝の報が届きました。両先生はOB会、長薬同窓会の中心であり、特に長薬同窓会は会長、副会長を失い両手をもぎ取られた状態になってしまいました。幸い各々の協力の下、順調に両会とも運営されていることに、2人とも一安心でしょう。両先生の想い出は尽きませんが、少し記させていただきます。

市川正孝先生は高校、大学と私の2年先輩で、薬学部では生化学教室で教官と悪魔鬼学生として指導を受けたのですが、先生と言うよりは年の差も少なく“美味しいお酒を振舞ってくれる兄貴”という感じでした。元々私が2年に進学した時、野球部の欠員補充で「熊本へ酒を飲みに連れて行ってあげるから野球部に入りなさい」と誘われて始まった付き合いでしたから、市川先生にお酒をご馳走になるのは当然のこと、市川先生の給料日には唯々先生の帰りを待つというのが私達（悪魔鬼酒飲み4年生は5人いたのです）の常でした。市川先生にとって迷惑な悪魔鬼だったと思いますが、そんなことは全く意に介さない、という本当に良い兄貴でした。社会に出てからもお会いした席の殆どに酒があり、楽しい有意義な酒をご馳走になりました。

想えば、長大病院院外処方箋発行の切っ掛けも酒の席でした。本年も11月大分県別府市で第64回九州山口薬学大会が開催されますが、前回平成3年別府市での九山大会の折り、別府の寂れたスタンドバーで市川先生を囲んで長崎市薬剤師会の当時は若い血氣盛んな3人の薬剤師との酒席での事でした。当時の学会のメインテーマは“医薬分業推進”でしたが、私達は酔うほどに元気に、と言うより横着になり、市川先生に「長大も早く院外処方箋発行を」と迫ったのです。最初はニコニコ笑って受け答えをしていた市川先生も、遂に「お前等の様なボンクラ頭ではないのだから俺はちゃんと考えているのだ！」と怒鳴られ驚きました。既に先生は長崎市全域の薬局を対象にした面分業の設計を立ておられたのです。平成3年11月21日、「話があるから病院まで出て来なさい」と呼び出され教授室へ行くと「12月から小児の専門外来の院外処方箋を発行するので長崎市薬剤師会

で応需体制をしっかりとやりなさい」との命を受けました。当時は複雑な広域病院の処方箋への対応は殆ど薬局が出来ていなかったので不安でしたが、別府でのこともあり断わる訳にはいきません。其処で原田均先生に相談し、先ず小児科の処方についての講習会をはじめ、調剤講習会を開催して備えました。12月17日から長大病院の院外処方箋発行を実施し、次いで平成4年2月から全国に先駆けて全面院外処方箋発行へと移行し今日に至っているのです。

長大病院の院外処方箋発行は分業を大きく前進させたばかりでなく、各薬局間の相互理解、病院薬剤師と開局薬剤師との病薬連携、開業医、患者からの評価、勉学意欲の高揚等々、薬剤師、薬剤師会に対しての市川先生の功績は計り知れないものがあります。

渡辺三明先生とは野球部OB会でのお付き合いが始まり、以後良く研究室へも伺いました。無邪気そのもの、そんな中に気配りの細やかな、というのが私の印象です。好んで“世話好き”と言われるために人の世話をした訳ではなかったでしょうが本当に私もお世話になりました。思えば人に任せせず何でも一人で背負い込む世話好きな性格が荷重な仕事量となり残念な結果になってしまったのでは、と悔やまれます。

いろいろとお世話になりましたが、中でも佳子先生を薬剤師会へ出して頂いたことには今でも感謝しています。昭和45年の事です。当時の長崎市薬剤師会会长、宮崎長二先生から、情報センターを創るから人を探すように、との命を受けました。その頃は唯一、九州大学薬学部に情報センターがあり、早速見学に行きました。今後大変重要な仕事になっていくだろうとは解ったのですが、さてこの仕事を請負ってくれる優秀な才能を持った薬剤師で貧乏な薬剤師会へ来てくれる人が居るのかと考えていると、頭にヒラメキました。カナダから帰国した三明先生の奥様です。薬学部の三明先生の所へ行き相談したところ、佳子先生に引き受けて頂けることになりました。形の無いところから苦労を重ね、今では県薬剤師会の中枢となった“医薬品情報センター”は佳子先生のご尽力と三明先生のご理解のお蔭と感謝しています。

大半の方が三明先生を“サンメイ先生”と呼んでいたと思いますが、私もずっと“サンメイ先生”と呼ばせて頂きました。それに呼応して、と言う訳ではないのでしょうか、三明先生は私のことを“タカギコウさん”と呼んでいました。遂に最後まで“ヤスシ”とは呼んで頂けませんでした。

二人して今日もヘネシーを酌み交わしていることと思います。 献杯！

### 市川先輩との出会い（あの時は痛かったぜ。市川さん）

昭和35年卒業 大塚 保雄  
(元遊撃手・三塁手)

市川教授いや市川先生（やっぱり44年タイムスリップして）市川さんと呼ばせて下さい。野球を通じて市川さんを知ったのは、私が教養学部から学部に進んだ昭和31年の春だった。私にとっては、ショッキングでもあり また痛い思い出もある。中原氏、北島

氏と共に野球部に入部し、午後練に参加した初日の事であった。『お前どこが守れるや?』『内野なら どこでも』『ならショートに入れ』のやりとりがあって、私はショートを守り、シートバッティングが始まった。

私の野球歴？ 小学校；ピッチャー、中学校；ショート それだけ。それも福岡学芸大学（現 福岡教育大）付属小・付属中という弱小校である。高校は小倉高校一当時の甲子園常連校一だったが、野球部には入れなかった。しかし大学受験に失敗してみると 時間だけは十分にあり、天気の良い土・日曜は殆ど草野球に明け暮れた。当時ゲーセンは勿論ボーリングも未だなかった。しかし野球は盛んで北九州でも門司鉄道管理局、通称 門鉄や八幡製鉄などの実業団が全国レベルであった。遊びは大人も子供も 野球と決まっていた。サッカーなど、部活で持つ中学は北九州でたった2校しかなかった時代である。高校野球くずれや会社の野球同好会の大人に交じって、結構強かった地元青年団のチームに属し、今では考えられないがトラックの荷台に乗って移動していた記憶がある。それだけに、大向こうを意識した派手なプレー、勝つための小細工、トリックプレーの得意なチームだった。

シートバッティングが始まったが、初めて手にしたトップボール・準硬式ボールにと惑つてボロボロしていたら、打ち損なったファールフライがフラフラとレフト線にまい上がった。瞬間 これはサードは捕れない。ましてレフトの西脇さんは絶対追いつけまい。ヨッシャ

ここで巧いところを見せてやれ と『もらった。任せ 任せ』と怒鳴って走った。ここは得意なコース、まともに捕っては面白くも何ともない とボールの落下点を通りすぎてヒヨイとグラブを回して背中で捕って見せた。何時もあれば ここで『ウォー』の感嘆詞と拍手がくるところである。ところが その日は違った。『ウォー』の前にガーンと一発殴られてしまった。殴ったのが市川三塁手だった。『オオ サードここまで来たかいい足してるナ。落としたわけじゃないのに何故？。まして試合じゃなく練習じゃない』ムツとした顔をしていただろう私に『そんなスタンドプレーするな！。まともに捕れ！』と怒鳴った。 びっくりした。

知らなかったのは、私だけだったらしい。市川三塁手はキャピキャビの高校球児だったので。『足速いじゃん』と感心するのもおこがましい事なのだ。まじめな高校野球は別格だと認識は私にもあった。長崎東の3年の夏九州地区代表決定戦で市川さんのエラーでサヨナラ負けしたことはあとで知った。

（柏葉 健児・背番号-9-（1986年）p5 「青春、野球そして長崎」市川教授の特別寄稿に詳しい）

真摯な姿勢は野球だけではなかった、学問においても奥義を究め、熊本大学、福山大学ウイスコンシン大学を経て昭和60年長崎大学医学部教授・付属病院薬剤部長に就任されたことは本学の誇りであり、また、共に白球を追ったチームメートひいては薬学部野球部の希望の星でもあった。

公私共に忙しい市川教授とゆっくり話しをしたのは まだ私が北九州市立八幡病院薬局長の頃 北九州市も院外処方箋発行の機運があり、当時既に院外処方発行に踏み切っていた長崎大学付属病院の状況を伺いに行った折り、市川教授ご夫妻と愚妻で飲茶を食べながら

ら、熊本時代の話やヨーロッパやウイスコンシン当時の話など聞かせていただいた。気さくな奥様も『ねーお父さん ねーお父さん』と市川教授に話されて非常に楽しい時を過ごさせて頂き、愚妻も一挙に奥様のファンになってしまった。市川教授も照れ臭かったのだろう、やけにメガネをふきふき笑っておられたのが目に浮かぶ。前夜高木康氏（35年卒）と3人で深更まで長崎の夜を満喫したので、酒の弱い私はアプアブの状態なのに 次々と出される料理をたいらげる市川教授の健啖ぶりに驚いた。博多で開かれるメーカーの研究会や病院薬剤師の研修会などで、座長や講演をされる市川教授に何度もお会いする機会があったが、私を見つけて『オイ元気にしとッヤ奥さんも元気？』と声をかけて下さった、教授 市川さん今はなし。

『あのときは痛かったぜ。市川さん。でも有り難うございました。』 合掌。

2000年9月22日



市川教授就任10周年記念  
(1994.10.2)  
野球部の面々と 右から辻、今泉、  
市川、工藤、富田、大塚

市川教授就任10周年記念  
(1994.10.2)  
市川先生を囲んで桑山君と大塚

## 渡辺三明先生を悼む

昭和35年卒業 大塚 保雄

長い間 薬学部野球部同窓会のお世話をありがとうございました。

野球部同窓会の連絡があるとそれからバッティングセンターに通っていましたと長崎に行っていたのはもう何十年前になるかなー○昭和町のグラウンドには2回行った記憶がある。内儀さんと行ったり、子供を連れていったり、1年1回の家族旅行のような時もあった。三明さんに初めて会ったのは増田和久君（昭和50年卒業年卒・現小倉記念病院薬局長）が4年生の秋だったから昭和49年である。まだまだ三明さんも若くショートを守り途中から あの独特のスリークォーターから変化球を繰り出していた記憶がある。OB 対現役の試合の時は何時でも口八丁手八丁と言うより口八丁口八丁のOB軍をまとめて『エー打順を発表します。卒業年次順に行きます。1番ファースト今泉 2番セカンド工藤 3番ピッチャー市川 4番サード大塚 5番ライト吉田研 6番ショート渡辺 7番キャッチャー笠田 8番センター吉田泰 9番レフト上島以上』昭和60年のOB軍の先発メンバー。卒業年次とは 三明さん大変ですね。

平成10年北九州地区の長薬同窓会が小倉で開かれ、渡辺三明先生は同窓会副会長として遠路北九州まで出張って頂き「大変な時期にかかっている大学の現状について」話して頂きました。どこの同窓会も若い方の参加が少ないと嘆いている中、近来まれに見る若い方々の集まりを得て非常に盛会で、幹事の一人として胸をなでおろしました。後刻渡辺先生よりご丁寧な礼状と記念のタイピンを頂いたが、あの踊るような個性ある筆跡も、もう見ることもできない。

今年1月市川教授の葬儀のおり、北九州からやって来た私を目ざとく見つけて、席に案内して下さった 三明さん。平成12年北州市立病院、北九州病院と2度目の定年をむかえて40年使った心身をリフレッシュしようと、内儀さんと旅行中大阪で、北九州総合病院薬局大石君（H7年卒・野球部）より渡辺三明先生の訃報を受けた。にわかには信じがたくそのまま長崎へ直行。列車の中で 古川 淳先生にお会いして詳しく話して頂いた。1月に市川教授を失い 今まで渡辺助教授も・・・・野球部も、同窓会もリーダーシップを持つ得難い人材を一気に失ってしまった。涙をそそったのは『市川正孝先生を偲ぶ会』の案内状を受け取ったが、発起人の最後に渡辺 三明の名前を見た時であった。

『三明さん市川さんと天国でゆっくり野球の話でもして下さい』合掌

2000年9月22日

## 市川先生と渡辺先生を偲んで

昭和36年卒業 永田 了一

市川正孝、波辺三明両先生のご冥福をお祈り申し上げます。

野球が縁で両先生と接する機会ができたわけですが、最初に市川先生を存じ上げたのは野球に於てではもちろんありません。それは教養の一年の時、講義が始まる前、勇ましく年輩の学生が三人教室に入ってこられました。その中の一人が市川先生でした。他のお二人は現在野球部OBの西脇、角田両先生でした。この時が市川先生との最初の接点といえば接点です。当時先生方は専門の四年生で、薬学部のバッジを我々に紹介に見えられました。長崎大学のマークは帆船で、薬学部は柏の葉だったと思います。この二つを、そのころ学生服だったので、襟の両側につけてみて、それなりに納得したのを思い出します。市川先生は卒業後、一番ヶ瀬先生の教室で研究生活にはいられました。この時から先生との接触は少しづつですが始まりました。それはまず前期、後期の期末試験に於てです、当時、一番ヶ瀬先生の講義は生化学と衛生化学で、その試験官として一番ヶ瀬先生と一緒に来られ、二人で試験の監督をされました。それも一クラス四十名程のところ、机と机の間を相前後して、休むことなく、いったり来たりで監督されました。そのためかどうかは知りませんが、みんなよく試験の準備には怠りなかったようです。そのころ薬学部は昭和町にあり、現在、付属中学校になっています。グランドが校舎のすぐ後ろにあり、自由に野球やソフトボールができたので、薬学部の専用みたいにしてみんな利用していました。そこでのフリーパッティングで、市川先生がたまたま打っておられたのを見たわけです。それは、今から思えばちょうど王監督が巨人の現役時代にボールをバットの上に乗せて打っていたのと同じ打ち方でした。そのことを後年お会いした時に申し上げたら「そうかなあ。」といっておられました。とにかく、先生はあと一勝で、甲子園だったそうです。

先生はその後、熊本大学薬学部に移られました。私も仕事が熊本担当の時、またお会いする機会がありました。そこでのことですが、申すまでもなくそこは全てといつていいくらい熊薬のジツで、開局しておられる長薬OBの先生方も少なく、静かな存在だったと思います。この中にあって、先生から熊本在住者で長薬の同窓会をしたいということで、お手伝いをさせてもらい、会場名は思い出せませんが、お城の下の坪井川に面したところで開催され、大いに盛り上がったのを覚えております。また話のついでに、焼き鳥屋も話題になり、それも熊薬からそう遠くないところで、水前寺のガード近くで、大きい赤ちようちんがぶら下がっており、安くて、うまいということでした。すぐ会社の同僚といってみました。中はかなり広く、カウンターと座敷があり、そこにはテーブルがありました。時には、先生もここで、研究室の先生や学生さんたちと一緒にプレーンストーミングをして研究の促進を図っておられるのだろうと思いました。味の方は今でもチャンスがあればいってみたいくらいです。

以上、先生との接触を、順を追って、それも側面から一方的に、勝手に書かせて頂きました。このように書いてみて改めて思うことは、先生はすべてに愛情を持って行動されておられたのだと思います。それは野球部が今も元気な姿で存続していること、また本業においては、私が申すまでもなく、先生は病薬の方向性で、病棟薬剤師を生み出され、それ

にともなって院外処方による調剤薬局が増え、ここで働く新たな薬剤師を更に生み出され薬剤師としての仕事に生きがいを与えられました。

合掌

渡辺三明先生につきましてはほとんどが野球部を通じての事です。卒業年度も6年ほど前があり薬学での接觸はありません。それが、卒業後ずいぶん立ってから、私も仕事にかまけていましたので、野球部のことはすっかり忘れていました。そういう時に、ひょっこり長薬野球部同窓会開催の知らせが、世話人・渡辺三明先生できました。場所は大学病院下の「天天有」でした。私は返事を出すのが開催日間際だったのですが、いってみると部屋は3階で、大勢の出席者であふれておりました。この時が先生との最初の接觸でした。先生は初対面にもかかわらず、それも遅れて返事したにもかかわらず、ちゃんと同窓の人の隣りに席を取ってあり、案内してもらいました。やっと雰囲気になれて会場を見回したら、OBの人たち、現役の選手と思われる若々しい顔、それらに混じって女性の大変多いことに気付きました。不思議に思い確かめてみたところ、マネージャーだそうです。それでもマネージャーだったらそんなに人数が必要なわけはないと思い、更に聞いてみると野球部と関係ない人も出席されているということでした。その時は理解できませんでしたが、今になってみると、渡辺先生の熱心な働きかけによるものと思います。このようなわけで、この会は年々発展を遂げ「天天有」では会場が狭くなり、より広い会場に移りました。ちなみに「天天有」の3階は、先日行ってみたら女将さんの画廊っていました。

また、この会は翌日がOBと現役との試合になっており、朝早くから決行されます。こういうわけで試合の結果は前夜のアルコールの量と相関することはありません。試合は二種類行われます。一つは、それぞれの代表または選出された選手によって、もう一つは、そうでなかつた人も交じて行われます。試合は昼前に終わり、終了後みんなが部室の広間に集まり、写真を撮り、皿うどんを食べて解散ということになります。これらのこと全てにわたって、渡辺先生が采配を振るわれました。

こうしてみると渡辺先生は熱心で粘り強く、すべてに気を配り、体をはってみんなを引っ張ってこられたものと思います。まだ早過ぎます、これからです。現実にそんな気がしません。また、私としても奥様を存じ上げているだけに残念でなりません。早く立ち直られることを心からお祈り申し上げます。

合掌

## 両先生と長薬拔天会・広島支部

昭和36年卒業 橋口 信彦

去る平成12年8月19日、長薬同窓会会长西脇金一郎先生、副会長伊予屋偉夫先生を広島に御招きし毎年恒例の広島長薬拔天会を開催しました。まず最初に市川正孝、渡辺三明両先生の御冥福を祈って黙祷を致しました。

市川先生は以前、福山大学薬学部に在籍されていた頃、広島の同窓会には興和新薬岡山営業所に居た永田了一君（S36卒）と一緒に度々来られました。又、平成6年6月には病院診療所勤務薬剤師研修会において、『調剤と情報』という研修会にて、中国、四国地区的勤務薬剤師約500名参加の我々に「院外処方調剤における情報伝達」のタイトルのもとに御講演されました。ちなみに、其の時の座長は、広島市安佐市民病院の沖川正義（昭和41年卒業卒）薬剤部長でした。内容は長崎における医薬分業に対する推進などで、中国地方の薬剤師には大変、参考になりました。同年8月27日広島同窓会に御招きして、会に先立ち「薬剤師職能と将来」と題して講演され内容はコストベネフィットは患者のもの、で会は盛会裏に終わりました。翌日は市川先生、大石照雄（昭和35年卒業卒、マツダ病院）、白松一良（昭和36年卒業卒、三共）、森崎孝幸（昭和45年卒業卒、三共）君が、山口県の宇部C.Cに行かれ、皆、良いスコア出たと後で聞きました。



写真は昭和35年頃の野球部忘年会、会場は不明

次に、渡辺三明先生は平成11年8月21日、広島同窓会に御招きし、会に先立ち長崎大学薬学部の講座、専門教育分野、教授、助教授等を説明され、平成11年3月卒業、修了者の就職、進学状況をお話しになりました。此の頃は製薬会社への就職がぐっと減ったとの事でした。私達が卒業した頃とずいぶん変わったなと思いました。最後に薬学部にホームページを開いたので、本ページをご覧になった感想・ご意見、ご要望をぜひ渡辺三明までお寄せ下さいと紹介されました。懇親会では、同年代の沖川正善、村上剛（昭和43年卒業卒）、品川龍太郎（昭和44年卒業卒）、森崎孝幸君らと特に親しく話されていたのが、今でも思い出せます。

両先生とも仕事半ばにして亡くなられ、さぞ残念だろうと思います。広島支部としましては、大変感謝しています。両先生の御冥福を心よりお祈りいたします。

## 市川先生との思い出

昭和37年卒業 吉田 研次

昨年、会社を定年退職し11月に大阪から長崎（諫早）に帰って来て、はじめて市川先生が入院されていることを知り驚きましたが、そのうち軽快退院されるだろうと軽く考え、退院されたら度々お会いできることを楽しみしておりましたところ、突然、先生の訃報の連絡を受け殊更驚きました。

先生は、私が昭和33年に大学に入学した年に薬学部を卒業され、助手として勤務されておられました。先生に初めてお会いしたのは、私が野球部に入部するきっかけになった時でした。それは、1年の教養の後期、昭和町の薬学部のグランドで高木康先生に捕手をして戴き投球練習をしていた時です。校舎から白衣を着て出てこられて高木先生の後ろから投球をじっと見ておられた方が市川先生（その時は市川先生とは知りませんでした）でした。先生の目に適ったのか、後日高木先生から野球部に入部を進められ入部することになりました。それ以降市川先生に数多くお世話になりますが、特に4年の教室の実験及び卒業後の就職にお世話になることになりました。

教室は、一番ヶ瀬尚先生と市川先生がおられた薬剤学教室に入りました。実験のテーマはクマリンの合成でしたが、一番ヶ瀬先生が10月に熊大薬学部へ移動されましたので、その後を先生1人で私たち学生5人（男性3人、女性2人）が卒業するまで実験及びその実験のレポートの書き方まで丁寧にご指導して下さいました。その時先生は助手として勤務されて4年目とゆう若さで私たちのため人1倍大変苦労されたことを思うと本当に感謝に絶えません。そして私たちの卒業を見届けられてから熊大薬学部へ転勤されました。

卒業後の就職について私が会社（その当時は、各会社の説明会がなくプロパー=MRの仕事は何をする仕事か知らない状態でした）の選択に迷っていた頃、先生に相談したところ快く相談に載って下さり、先生から野球部の先輩である角田正之先輩が就職している塩野義製薬を受けたらどうかと貴重な助言をして下さいました。そして昨年定年退職するまで37年間当会社に勤めるようになりましたが、これも先生と出会いが逢ったからこそと思っております。

今回諫早に定住することになって、これから先生と色々な話いや野球部のOB戦でいっしょにプレーできることを楽しみにしておりましたが、そのようなことが適わなくなり非常に残念なりません。

<写真は36年11月に教室全員で福田の海岸に遊びに行った時のものです>



## 市川正孝先生とタバコ

昭和38年卒業 左利 龍彦

先生に初めてお会いしたのは、教養が終わり昭和町の校舎に移った昭和35年の春でした。当時、先生は生化学教室に所属されていたと記憶しています、小生は野球部の他に庭球部、卓球部に所属しており、校門の脇にあったテニスコートでの練習を先生が生化学教室の窓から見ておられたのを思い出します。先生が昭和37年春に熊本大学へ移られるまでの二年間、昭和町校舎で一緒だったと思うのですが、何だか先生は雲の上の存在でしたので親しくお話をさせて頂いた記憶はありません。しかし野球部の練習では先生のノックの厳しかった事と遊撃手の守備を教えてもらった事は今でも覚えております。昭和36年の九葉連において吉田・平バッテリー(昭和37年卒)で見事に優勝したチームに遊撃手として貢献出来たのも偏に先生のお教えの賜物と思って居ります。九葉連での優勝は小生の長崎での学生生活最大の思い出であり又最大の喜びでもあります。

昭和38年に吉富製薬(現ウェルファイド)に入社し、以後東京、横浜、大阪、広島と転勤を重ね各地の大学病院薬剤部長から先生の噂はよちゅう聞いていましたが、残念ながら担当地区の関係で直接お会いする事は有りませんでした。その間、同社の村野弘和君(昭和54年卒)に何度もOB会に出席する様言わっていましたが、多忙にかまけて出席しなかったのが先生との再会を遅らせる事になりました。

平成5年4月日本たばこ産業に在籍出向する事になり、今度は東京目黒に単身赴任しました。任務は医薬事業部営業の立ち上げでした、平成6年無事立ち上げを果たし初代営業部長として作業を進めている時にある書物で市川先生の名が目に止まりました。先生の留学先の一つでありましたウィスコンシン大でのタバコに関する論文でした、勿論日本たばこ産業に勤務する小生にとってはネガティブデーターでした。困ったなと思うと同時に、早急に先生にお会いして色々お話を伺いしようと思ってた矢先の平成8年7月に3年余りの日本たばこ産業勤務を終えて吉富製薬に復帰しました。ここで又先生との再会が延びる事になります。吉富製薬入社以来何かと相談に乗って頂いていた昭和大学黒岩幸雄教授(昭和30年卒)の退官記念パーティーが平成9年3月に虎ノ門のホテルオーハラだつと思ひますが盛大に挙行されました、この席で念願の市川先生に再会する事が出来ました、今思えば黒岩先生に再会の機会を作つて頂いたと感謝して居ります。学生時代の話、タバコの話等色々話しているうちに一度大学病院へ来なさいと言う事になりました、その後何度も連絡を取りましたが、先生のご多忙さは驚くばかりで二三度アポなしで大学へ押し掛けましたがお会いすることは出来ませんでした。結局、黒岩先生の退官記念パーティーでお会いしたのが最後になりました。唯々残念でなりません。市川先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

## 市川・渡辺両先生を偲んで

昭和39年卒業 山本 浩三

お二人の訃報に接し、世の無常を強く感じています。長崎を離れてから毎年恒例のOB対現役の親睦試合に案内を頂きながら一度も応えていません、長崎のことも忘れかけている自分に、野球部同窓会から突然の原稿依頼を受けて戸惑っています。わずかな記憶を頼りに以下の拙文をお送りすることでご容赦願います。

市川先生は6年先輩で、花の33年組の名選手とお聞きしていますが、直接お話する機会はなかったように思います。私が3年生の頃だったと記憶していますが、グランドで練習中にバッティング投手をしていた時、当時薬剤学教室におられた先生が見ておられて、もう少し腕が上から出て身体が開かなかったらもっと良い球が投げられる、と側の人に話しておられるのが聞こえてきたことを覚えています。身体が早く開く悪い癖はその後も直りませんでした。その後先生は熊本へ行かれ、お目にかかる事はありませんでした。先生の思い出は、野球よりも医薬分業のことで強くあります。長崎大学病院の薬剤部長に就任された頃からしばしば雑誌で、医薬分業の魁として紹介されているのを目りました。今でこそ分業はかなり進んで来ましたが、いち早く分業を推進されたすばらしい先輩がおられることを心強く思ったものです。私も現在高槻市内の薬局で調剤と服薬指導の仕事を少し手伝っていて、医薬分業と言えば市川先生のことがすぐ思い浮かびます。

渡辺三明君とは数年間一緒にプレイしました。私が3年先輩に当たりますが、研究生と大学院との3年間、私はコーチ役のような形で彼らの練習にも出来るだけ参加しました。当時のチームには高宮君という剛球投手がいて、私はよく彼の球を受けました。今も時々左手親指の付け根が痛むのは彼の荒れ球を捕球したせいです。その彼も早世し残念でなりません。三明君は確かに内野を守つていてチームのまとめ役でした。後輩にも良く声をかけ適切なアドバイスをしていました。彼が卒業した年、私も田辺製薬の大坂研究所へ帰り、彼は大学に残りました。その後一度会っただけで年月が経過しました。平成7年の秋、小井田先生と中牟田先生のおられる摂南大学で関西在住の野球部OBが集まって親睦試合をしようということになり、三明君がはるばる長崎から来るというので、彼を慕つて後輩が多数集まりました。彼がずっと長薬野球部を支えてきたことを、そのことから知りました。残念ながら私は野球の試合には参加出来ず、夜の懇親会にだけ出席したのですが、その日の試合は三明君が好投し、そのことを彼がうれしそうに話してくれたのでした。ああ、彼も野球少年そのままだなと思いました。その後も毎年この会は続いていますが、失礼ばかりしていて、二度と彼に会えないままになったことは痛恨の極みです。

私も40歳まで会社の連中とチームを作り、高槻市の大会に監督兼捕手で出場していました。その後体調を崩し今ではボールを握ることはできませんが、野球への思いは強く、少年時代に三角ベースで日が暮れるまで遊んだことが忘れない野球少年の一人です。お二人のご冥福をお祈りするとともに、来世でもまた一緒に野球が出来るといいなあ、その時は甲子園球場がいいかなと思っています。

合掌。